平成 29 年度第 1 回館林市子ども・子育て会議　会議録概要

１　日　　時　　平成２９年７月２５日（火）午後３時００分～４時３０分

２　場　　所　　市役所５階５０３会議室

３　出 席 者

【館林市子ども・子育て会議委員】　１３名

森委員、永井委員、大谷委員、角田委員、田村委員、篠塚委員、小山委員、鎌田委員、増田委員、前山委員、川島委員、砂賀委員、矢動丸委員（以上名簿順）

【事務局】　１０名

保健福祉部　：中里部長

こども福祉課：石崎課長、妻神子育て支援係長、萩本保育係長、砂賀

健康推進課：野澤課長、武政母子保健係長

教育総務課：青木課長、武井総括係長

学校教育課：山口学事係長、金子主事

生涯学習課：石井課長

【傍聴者】　なし

４　議　　事

(1)館林市子ども・子育て支援事業計画

平成 28 年度実績および平成 30、31 年度中間見直しについて

(2)その他

・子どもの生活実態調査　中間報告について

・今年度スケジュールについて

５　配布資料

・会議次第

・館林市子ども・子育て会議委員名簿

・資料１　館林市子ども・子育て支援事業計画に関する中間年の見直しの考え方

・資料２　館林市子ども・子育て支援事業計画
平成 28 年度実績および中間見直しについて

・資料３　館林市子どもの生活実態調査の結果について（中間報告）

・資料４　館林市子ども・子育て会議　H29 年度年間スケジュール（予定）

６　会議内容（概要）

1．開　　会

2．あいさつ

・森会長

3．議　　事

(1)館林市子ども・子育て支援事業計画

平成 28 年度実績および平成 30、31 年度中間見直しについて

・事務局より、中間年の見直しの考え方資料１、および見直しを検討している事業説明資料２　その後、質疑応答（主な内容）

【質疑応答等】

委　　員：見直しは妥当ではないかと伺った。私どもが認定こども園認可して以来、市よりご援助、ご指導いただき、仕事を進めさせていただいている。館林市の子ども達の幸せのために、できる限り努力し仕事に取り組んでいる。色々考えると、一つ特色を盛り込むのは非常に難しいと思っている。私どもが幼稚園をスタートした時は、英語教育を取り入れ特色を打ち出し、ＮＨＫ等に取材をしていただいたりしていたが、最近は太田市に取られてしまったように感じている。なんとか館林市ならではの特色を打ち出していきたいと考えているが、中々難しい。市や委員の皆様方のご指導を受けつつ、できる限り良い教育を行っていきたいと考えている。

大変古い話ですが、館林藩の時代は、秋元公が大変教育熱心な方で、当時、安政 4 年、1857 年に藩立洋学所を作られ、オランダの教育を藩主に対して行ったという記録がある。これは、明治 4 年の廃藩置県で終わりになってしまったため、11 年間の短い間でしたが、群馬県内で唯一進んだ教育を行っていた。今現在は、館林市は人口減少という時代を迎えている。ここでなんとか良い案を出して皆さんで考えていただき、人口減少を食い止めて、素晴らしいまち館林を発展させていけないものかと考えている。また、委員の皆様、市の皆様よりご指導を仰ぎ、より良い教育を行っていきたいと考えている。

会　　長：徳川綱吉が館林の藩主だったということを改めて知った。ここにいる皆さんは、館林がより良くなるようにと同じ思いでいると思うが、人口減少については、館林だけではなくどこも問題となっている。様々な手立てのところで出会いがなければ中々その先には行かない。赤ちゃんからおじいちゃん、おばあちゃんになるまでの過程で、様々な場所でそれぞれが一肌脱がないと全体が動くのが難しいのかもしれない。

ただ、これだけの皆さんの知恵が集まっているので、思いつきでも良いのでご意見を出していただいて、市の方でも、皆さんの意見があればこそ方向性が決まっていくと思うので、折に触れて気がついたときにはご発言をお願いしたい。

委　　員：5ページの放課後児童クラブについて、去年11月3日の上毛新聞記事にもあったが、まだまだ、1支援単位で大幅に子どもの数が超過しているクラブがあるということで、館林は該当しないというデータになっているが、実際に1支援単位で71人以上を預かっているクラブはあるか。

会　　長：放課後児童クラブは、当初は低学年だけの預かりだったが、今は高学年も含め行っていて、人数が大きく変動した経緯がある。

事 務 局：今年度5月1日現在のデータですが、71人の放課後児童クラブが1支援ある。その他のクラブはそれ以下で収まっている。

会　　長：利用する人が少ないのか。

委　　員：今は子どもの数が減っている割に、利用者は増えている現状がある。確かに、71人以上のクラブは1支援のみとのことだったが、理想的には40人前後と言われている。私のところも先生方に色々話を聞くと、責任を持って、子どもの成育に対して国が示している指導を行うとなると、やはり理想である40人前後がそれに則した運営ができるということで、私もそう感じている。これはかなり前からの課題であるが、その40人にどうやって近づけるか。あるいは、もう一つの基準として、1人あたり1.65平米という施設の面積も基準になっている。その両面から理想を追求することをしていかないと、それぞれのクラブが定員に収まっているということではまずいことになる。当面は仕方ないが、将来的にはどうやっていくのか計画がなければならないと思う。一つの解決方策として、前にも申しあげている放課後子ども教室というものを館林にも取り入れて、学童クラブに行く必要はないけれども、致し方なく、館林には学童クラブしかないため子どもを預けている方もいると思っている。放課後子ども教室で、学校の空き教室を利用し運営すれば、学童クラブ側も理想に向けた人数に近づけて運営ができると考えている。その辺はどうお考えでしょうか。

会　　長：二本立てということですね。

委　　員：国もそれを提唱している。

事 務 局：放課後子ども教室について、検討が具体的に始まっていないが、問題点としては把握している。

委　　員：学童クラブ代表者会議は年2程行っているが、実態は代表者が出てい

ないというのと、その場が委託料の申請の場になってしまっている。そうではなく、私が発言している内容について各代表がどうお考えなのか、館林はどうすべきなのか、学童クラブの世界だけでも、意見調整や提案の場にしていった方が当然良いことに繋がると考えるが、中々実現していないのが実態である。本当の意味での代表者会議を通じながら、こういった議論が積み重なるべきと考える。

会　　長：幼稚園の保護者代表としてはいかがか。短い時間に就労している場合の家庭のことを角田委員はお話ししていたと思うのですが。小学校の空き教室で子どもを面倒見てもらい、ある程度の時間になったら帰ってくるという状況があったらいかがか。

委　　員：子どもを小学校で預かってもらえると安心である。

会　　長：学校の先生に見てもらうことは難しいかもしれないが、場所的に貸してもらえれば親としては安心と思う。放課後子ども教室について、ぜひご検討をお願いしたい。

今後、支援単位をオーバーした時に、短時間と長時間就労で何人いるのかの割合を出してもらえると良いのではと思う。

委　　員：学童クラブ代表者会議のメンバーはどのような方が出ているのか。

委　　員：代表者が出るクラブもあれば、支援員、父母会メンバーが代表になって出てくるクラブもある。放課後児童クラブの構成員とすると、経営陣および職員、利用者の関係の中で、父母会メンバーであると、利用者の立場になっている方もいる。また、職員が代表となると職員の処遇だけを考えた意見になりかねない。組織論的に議論ができるよう、本来あるべき姿に戻して代表者会議ができればと考える。

会　　長：障がいを持つお子さんを預かってもらえる学童はあるのか。

委　　員：特別支援学級や特別支援学校に通われている子どもさんが利用する、放課後等デイサービスがある。国のサービスになるが、利用する場合には親御さんに市へ申請をあげていただく。また、利用する前にサービス等利用計画というものを作成しなくてはならない。例えて言うならば、介護保険の中のケアプランのようなもので、お子さんの状況を良く聞き取りをさせていただき、支援についての計画を作成する。それを行政へ提出し、受給者証を発行してもらう。その受給者証を持って、希望する事業所と契約し利用するという流れになる。学校が終わる時間に各事業所が学校へ子どもを迎えに行き、その後支援し、夕方になって親御さんが各事業所へ迎えに行くことになる。現状、放課後等デイサービスは増えている。

委　　員：ファミサポでまかせて会員として、その施設へ送迎を行うことがある。

ファミサポでは、親が子どもの送迎ができないときに親の代わりに、送迎をすることができる。

会　　長：放課後児童クラブは、今の社会の中でキーポイントとなっている部分がある。青年期になる前の時期をどう過ごしてきたかというのが、子どもの育ちで重要になっている。だから、低学年の子ども達だけが放課後児童クラブに行っていたのを、なぜ小学校全体に対して広げたかというと、人が全然見ていない寂しさとか心の育ちが大切な 9 歳、10 歳の壁といいますが、脳みそが完全に仕上がったときに、その子が心深く物事を考えられるときに周りに誰も人がいないというのは、その子の育ちに非常に大きな影響がある。今、放課後児童支援員は認定資格になり、子どもの育ちが分かった人、叱り方等、教育的な視点を持った人に支援員になってもらわないと、子ども達の育ちを良い形で育んでいくことができない。そうでないと、大人になったときに私たちが考えもしないような動きをしてしまい、皆さんが首をかしげるような事件が起こってしまっている。そのような視点を持って、きっちりやっていかないとならないと思う。

(2)その他

・子どもの生活実態調査　中間報告について

資料３事務局より説明後、質疑応答（主な内容）

【質疑応答等】

会　　長：想定したとおりの結果もあるが、そうではない結果もあったとのことで、よく言われているのが、うちは家族で暮らしていて家族団らんが多いように見られるが、ご飯はみんな一人で食べている。いわゆる孤食というもの。

そうなってくると、逆に、一人でいることが当たり前の家だと、一人ぼっちでいることを子どもは仕方ないと容認できるが、おじいちゃん、おばあちゃんが一緒にいて、お父さん、お母さんもそれなりに家にいるのに一人でご飯を食べる方が、子どもはより一人ぼっちと感じてしまうとのこと。高齢者の方も同じようだが、そのような分析の仕方もあるとのこと。

今回、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園　教育・保育要領の冊子をお持ちしたが、幼稚園教育要領の中の第１章　第２　幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」ということで全 10 項目あるが、これは、保育所

と認定こども園の方にも書いてあり、共通事項になった。平成 29 年 3 月に告示となり、平成 30 年から施行となるが、それだけ子ども達がちゃんと育っていない証と考えられる。

子どもの生活実態調査の分析を行っていく中で、この 10 項目を考えたときにどうなのか、子どもが置かれている状況はどうなのかということを考えていくと館林独自を打ち出せるのではないか。今回出る調査結果をあてはめたときに、館林市として子ども達をこのように育てていきたいから、調査結果からこのようなことが見えてきたというように出せるとおもしろいのではと思う。私自身、生活実態調査は大変重要と思う。子ども達の日々の生活があるからこそ今がある。子どもに理想論を話すことは簡単だが、子どもは理想を作ることはできない。子どもが理想的な生活をしていくためには、大人がその場所を環境として整備してあげることが重要な仕事となってくる。そのために、子ども・子育て会議はある。

市民として委員の皆様はいかがか。

委　　員：小１の子どもがいる。まさに、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿があっての小学校の学習があるはずだが、かすってはいると思うが、この間通知表をいただき、先生方から見て丸がつく姿と親から見る姿は同じかどうか分からない。うちの子達は、学校が終わるとまっすぐ家に帰ってきて家族と過ごす時間はある方だと思うが、私が家族と過ごすと良いかなと思い家にいても、子どもは友達と遊びたいと言うことがあり、これはこれで社会性として身についており、この 10 項目に値すると思いながら資料を拝見している。

委　　員：年長の子どもがいる。家で過ごしている姿と保育園で集団で過ごしている姿は違い、先生の話からも成長を感じているが、この 10 項目を見るとまだまだだなと感じる。

委　　員：子どもの姿は親を映し出すというように、子どもではなく、親の教育の方が必要なのではないかと思う場面を多々目にすることがある。子どもの教育は教育機関など学校がすると思うが、子どもの一番身近な先生は親かなと思う。子どもは学校から言われることと親から言われることが違うと、子どもは何を信じていったら良いのかが分からなくなってしまう。子どもが育たないというのは、親自身の問題なのかなと思う。

会　　長：ということは、子育て支援の中に親支援も入った方が良いということですね。

委　　員：親の教育も必要だと思う。

会　　長：熊谷に保育関係者で成り立つ「親心を育む会」というものがある。親に全ての責任をという訳ではなく、親御さんも子育てで御苦労されている訳だから、その親御さんにどのような環境があれば皆が考える良いお母さんとしてしっかり子育てができるのかと、皆で見守るというもの。保育士は保育に関する指導を行う役割になっている。親支援についてご意見いただきたい。

委　　員：親支援についてというか、計画策定時の第１回目からこの子ども・子育て会議に関わらせていただいて、この会議というのは、今この場で行われている必要性が特にないというか、要するに館林市という地域が、何かの産業の特区を受けているとか、農業等についても特になく、ニーズ調査にしても中間見直しにしても生活実態調査にしても、事務局から驚くべき数字が上がってくることはなく、平均的な良いまちということが再確認されていると思う。加えて、委員がその先に一歩出るために何か特色あることはないかということだったと思う。その意味では、この会議は大変有用な会議だと思う。加えて、親支援はどうですかと言われたが、平均的なまちである限りにおいては、親支援についてもこうしたほうが良いという事例をあげるに及ばないと思っている。困っている人も確かにいますが、実態として特筆すべき数値がなければ、各幼稚園、保育園の施設において、きちんとした保護者支援が行われていると思っている。

会　　長：館林市は平均的で、今のところ問題があるような人が育つ土地柄ではないということが分かって、逆にほっとしたところがある。包丁を振り回すようなことが急に起こるような市町村もあるよう。特に、今回、子どもを守る地域ネットワーク事業が追加されたが、要保護児童対策地域協議会が大きく動いていることもなく、要保護児童等が特に多くいる地域ではないということが理解できると思う。

委　　員：保育園でも何人かは保護者支援が必要な方がいる。また要保護の関係で、ケース会議等で相談している方もいる。各園それぞれ何人かいるが、会議等で相談する中で、関係機関である保健センターや相談員の先生と関係を持ち、どうすれば良いか方向性を検討し対応しているので、安心している。

会　　長：市や保育園等でそれぞれ対応し取り組んでいることが分かった。他に何かあるか。

委　　員：クロス集計の関係で、このデータ分析は市の職員だけでやっているのか、専門的な企業でやっているのかを聞きたい。

事 務 局：委託はしておらず、エクセルを用いて、担当他、詳しい者と自前でや

っている。

委　　員：先日、ＮＨＫのある番組でＡＩによるビッグデータの分析という番組で、面白い色々な見方ができるという話をしていた。とんでもない考えられないようなことと関連性があるということを言っていた。その理由まではＡＩは分析できないが、データとして関連性があるということを色々な切り口で説明をされていて、中々面白い番組だった。ＡＩによるとなると、それこそ相当お金を使って専門分野の会社に分析を依頼することになる。期待するのは、色々な見方をすると何か見えてくるところがあるのではと思う。

例えば、差替資料の２枚目の「あなたは、放課後をどのようにすごすことが多いですか。」と「自分はひとりぼっちだと思う」というところで、全体の数値としては、先程ご説明があったように、そんなひどい状態に館林はないと言えるかもしれないが、ただ悪いほうにスポットを当ててみると、一番左側の「家族ですごす」という中に、「自分はひとりぼっちだと思う」という方が 99 人、ややあてはまるが 235 人。そうすると、334 人の方がここのところに存在する。家族とすごしているけれども自分はひとりぼっちだと思うという。これは一体どんな環境の子どもがそう思っているのかという分析をすると、何か課題が見えてくることもあり得ると思う。

だから、クロス集計をするときは、そういった見落としがちなところにも、もう一回、一段、二段深くなぜかと追及しながらデータ分析すると、何か課題が見えてくるデータが見出せるのではないかと思う。

私も仕事が、こういうビックデータに近いようなことを会社でやっていて、そういう見方をしなさいと上司から言われた経験があるので、ぜひ、そういうところに上手くスポットを当てながらＡＩの力を借りることなく分析をされたら良いのではと思う。

事 務 局：参考にさせていただきます。ありがとうございます。

・今年度スケジュールについて

資料４事務局より説明後、質疑応答（主な内容）

【質疑応答等】

会　　長：今年度スケジュールについて、事務局より説明がありました。委員選出依頼がありましたら、ご検討ください。

また、「ぽんちゃんの子育て応援ガイドブック」はご覧になりましたか。病気やケガの対応マニュアルや赤ちゃんが泣きやまないときの対応も

あって、大変参考になると思う。

委　　員：ぽんちゃんの子育て応援ガイドブックは、どのような形で親の手に届くのかを教えていただきたい。

事 務 局：平成26年度に妊娠出産包括モデル事業で、先駆けて妊娠出産包括支援としてやらせていただいた。その中で子育て支援の一環として、昨年から発行させていただいている。配布としては冊数の限りがあるため、まずはこれからお母様になられる方へ妊娠届出時の配布や、こども福祉課窓口に置いて利用してもらっている状況。

委　　員：この会議に出させてもらって、色々な課題が見えてくる中で、幼稚園ではどのようなことができるかを持ちかえって検討させていただく。

委　　員：先程、館林の人口減少の話が出ていたが、私はボランティアで結婚相談員をしている。平成27年度の統計調査から、館林市の人口は76,667人。また、出生数523人。内訳は、男児が268人で女児が255人となっている。この年は329組結婚している。婚姻率は4.3%。群馬県全体では8,820組となっていて、それほど多くない。また、離婚件数は131件。離婚率は1.71%ということで、やはり離婚が毎年あるということ。平成27年度の国勢調査から、25～49歳までの男性12,745名いる中で5,352名が未婚となっていて、未婚率42.43%。また、女性は11,432名いる中で2,801名が未婚となっていて、未婚率24.64%。男性の方が未婚率は高いという結果となっている。

私ども社会福祉協議会で結婚相談員としてやっていて登録制となっているが、登録者数が減ってきている。平成28年度は登録者52名。

ただし、その中で女性の登録数は7名程。それに対し、男性は50名弱となっている。問題となっているのは、女性の登録者がいないということ。データから見ると未婚が何千人もいるはずだが。

結婚相談員は今13名いる。毎月会議があり、研修も泊まりがけであり、福祉まつりでも1日仕事をしている。婚活パーティーも2回やっている。この間も相談をやったが、3時間で14～15名。お見合いの日程調整から立会いまで行っている。ボランティアとしてやっているが、中々重労働となっている。そこまでやっていても、最近は男性の登録者も減っている。というのは、女性が少ないためで、今女性を増やそうということで取り組んでいる。我々が苦労する成果が出ていない。

現在、群馬県でも婚活に力を入れて取り組んでいる中、館林市でも少しでも結婚組数を増やせるようにやっていきたい。

もう一つ、子どもの生活実態調査で、教員をやっていた関係で気になるのは、自己肯定感について。自分の将来が楽しみだとか、自信に繋

がると思うが、とにかく、4人に1人が自己肯定感が低い結果となっている。これは、日本人の特徴らしいが、新聞記事に掲載されていたが、国際的に日本は自己肯定感が低く、将来を悲観する割合が日本が一番高くなっている。「自分はだめな人間だと思う」という先入観を持っている子が日本は72.5%、アメリカは45.1%、中国は56.4%、韓国が36.0%。それから、「自分の希望はいつか叶う」は、日本は67.8%、アメリカは83.9%、中国は80.7%、韓国は82.6%。韓国は、子どもは受験受験で就職がないという状況なのに、いつかは希望が叶う、一流大学に入って金持ちになると思っている。これは、学校の教育にも影響があるのかなと思うと同時に、親御さんの姿勢もあるのかなと思う。ということは、日本全体で考えていかないと大変なことになるという気がしている。力がある人とない人、これは貧困も関係するが、生き方でも格差が出てきているのかな。その一因をなしているのは、日本の政治にあるのかなと思うが。私も館林生まれ、館林育ちなので、なんとか館林市の子ども達が立派な生活ができるように応援していきたいと思っている。一丸となって頑張る他ない。

事 務 局：活発なご意見をありがとうございました。この会議が一番最初に行われたのは、平成25年でした。この計画を作るときに、この会議ができた訳ですけれども、それが2年ごとの任期で2回程繰り返して参りました。今回、繰り返しの年になりますが、今回計画を見直している部分もあることから、再任は妨げないということになっておりますので、ぜひ協力していただける方は協力していただきたいと考えております。この2年間本当にありがとうございました。本日はありがとうございました。

4. 閉　　会